トランスマイクリエーション

Rinn5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トランスマイクリエーション

【Ｎコード】
Ｎ９６２４Ｘ

【作者名】
Ｒｉｎｎ５

【あらすじ】
ただの高校生だったはずの俺、神坂優斗（かみさかゆうと）は、最近世間を騒がしていた通り魔に襲われかけた幼馴染を庇い助けた。そこで終わってればいいものの、俺は逃げ出した犯人を捕まえようと躍起になって、後先考えず道路に飛び出してしまいトラックにひかれてしまった。
ああ、儚き人生。しかし、物語はまだ終わらない。気づけば俺はなぜだかまだ生きており、そして、目の前には武装した謎の集団がいた。さらに、わけもわからず謎の集団に襲いかかられ二度目の死を覚悟したその時――

行き当たりばったりの主人公がファンタジー世界で奮闘していく物語です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。
内容も更新もかなりのスローペースになりますが。頑張っていきたいと思っています。

駄文ですが、暇つぶしに読んでやってください。

プロローグ

刃、刃、刃、刃。

それは物を切るもの、あるいは人を斬るために存在するもの。

常日頃平和的に毎日を過ごしていれば見る機会すらほとんど無いそんなもの。

事実ただの高校生である俺は、料理をするときでさえ包丁をにぎればビビって手が震える。

そんな非日常の塊が今、俺の命を刈り取らんとしてこちらに向かってきている。

鈍色に光るそれは、ところどころに赤い液体がついていてこれまでにもたくさんの命が刈り取られてきたってことがわかった。

そして、当然ただの高校たる俺は突発的なそれを回避できるはずもなくぶざまに切り刻まれていく。

右足、右腕、腹、そして首筋。

順に切られた部分からせき止めていたダムの水が決壊し、そのあふれんばかりの容量をもってして水撃に変わるように血が噴き出した。

あぁ、ちくしょうめちゃめちゃいてぇ。

何だかよくわからない何にたいしてかさえわからない後悔と理不尽なことにたいする怒りが痛みによる叫び声とともにいまにも爆発しそうだ。

現に俺は、情けない姿だけは曝すまいと唇を血がでるまで噛み締め俺を切った相手を睨み付けようとしているが、その目からは涙がとめどなくあふれ出てきてろくに相手の顔も見えちゃいない。

顔はもう涙だか涎かわからないものでぐちゃぐちゃだ。体も血だか汗だかわからない液体でベトベトして気持ち悪い。

心拍数が上がって体が火照るように暑い気がするのに、背筋から冷気のようなものが駆け巡る感じがした。

ああ、また死ぬのか。

諦めにも見える薄い笑みがこぼれる。

人は、死ぬとき走馬灯のように過去を振り返るって言う

がありゃ嘘だな。少なくとも俺にはそれは当てはまらなかったようだ。

何より今もなおどうにかして生き残れないかと心に反して動く目が、体が、そうさせてくれない。

通常では考えられないぐらいの情報が頭をパンクさせようとするがごとくぶち込まれ、そのせいか頭痛がする。

案外こっちの頭痛の方が体中の傷よりも痛いかもしれない。

しかし、その痛みも次第に感じなくなっていく。頭の中に靄が、かかるかのように、意識がとうのいていく。

そして……俺は、薄れゆく意識の中それに気づいた。

秘密の花園に咲く薔薇のように濃くそして鮮やかな血しぶきが舞い散るこの混沌のなかで。――天使を見つけてしまった。

第一話　日常はストーカーと共に

成績、運動神経ともに普通……あ、いや足だけは少し速いか。

そして、学校および私生活での問題は一切なし、髪も目も目立ちたくないという理由で、今まで一度も染めたこともなければ、カラーコンタクトなんぞを手に取ったこともない。

髪の手入れさえふだんあまりしないのでいつもぼさぼさだ。

容姿は……容姿は、普通である……と、おもう。

と、とにかく、そんな平々凡々な17歳、神坂優斗（かみさか ゆうと）には、ある悩み事がある。

「――でね、あまりにもしつこかったから蹴り飛ばしてやったんだ。で、そしたら――」

なんの取り柄も問題もないはずの俺が、いや、ないからこそなのか、俺には幼いころから悩み事があった。

「――もう、これだからああいう人は――って、ちょ、ちゃんと聞いてるの優斗。聞いてますか～おーい、ゆーとさーん。おーい。」

友人は皆この悩みについて俺が話そうものなら、<はてろ>だの<唐変木>だの<このイケメンめが……リヤ獣は爆発しろ>だのむちゃくちゃに言ってきやがる。

くそ、なんでだよ……俺はケメンなんぞじゃないっちゅ～に、そもそもイケメンというのはだな――

「ね～てば！！　聞いてるの優斗！！」

ズイっ！

「っうを！！なんだよ、ちょ、近いってびっくりするじゃないか。」

「ちょと～さっきから話しかけてるのに、ずっとだんまりして……ちゃんと聞いてたの？それとも、そんなにも私と、しゃべるのはいやだっていうの！」

「いやいや、ちがうって！！　ちゃんと聞いてたって、ほら、あれだろ……えっと、その～……そう！　委員長の田中が飼ってる猫のジョルジュの話！　いや～ほんとあのふてぶてしいデブ猫みてたらなんか癒されるよな～。こないだなんて俺、あのデブ猫のおかげで――――って、あの～星羅さん。お目がお据わりになられていますよ」

「……はぁ、今、私が話していたのは昨日私に告白してきた

男の子の話！　優斗が話してくれって言ってきたから話してるんだよ。ほんとうだったらあんな人のこと、思い出したくもないっていうのに」

「あ～そだった。そうだった、ゴメンって。それにしても星羅はほんっとモテるよな、今月で何回目だ？」

そう俺の悩みとは今、俺の目の前にいる美少女、時任星羅（ときとうせいら）のことである。

いや、彼女がどうというわけではない。むしろ彼女は完璧といっていいだろう。

流れるような黒髪は、肩のあたりまで伸ばされており、雪原を思わせるようなその肌は白く透きとおっている。そして、黒真珠を思わせるかのような勝気な瞳は見ているだけで吸い込まれそうだ。

さらに、彼女の秀でているところは、容姿だけではない。テストをやらせればいつも満点をとり。スポーツをやらせればその素晴らしすぎる運動神経を隠すことはできようはずもなく。そして何より、極めつけは誰とでも平等に接する性格と太陽を思わせるような笑顔と明るさである。この性格のおかげか彼女のファンは男子だけにとどまらず女子にもたくさんいる。

「む～こっちは、迷惑しているだけなの。ファンクラブとか名乗る意味わかんない集団解散させたばっかなのにぃ……鬱だ～ファンク

ラブは優斗のだけでいいっていうのに」

「はぁ？　なんでそこで俺の名前がでてくるんだよ。俺はお前のファンクラブなんぞに入っとらんての」

では、問題とは？それは、彼女が幼馴染という理由だけで、俺とほぼ全ての行動を共にしていることである。美少女の幼馴染だと～ふざけんな。うらやましすぎるぞ！と大半のやつはうらやましがるだろう。

いや、俺だってこんな子が近くにいるだけならそりゃ嬉しいよ。……そう、だけなら。星羅の熱狂的なファン（ストーカ野郎）が星羅に振られたことなどで、何かにつけて俺に逆恨みをぶつけてこなければ。

「はぁ、ほんっと優斗は鈍感っていうか、にぶチンっていうか……私の気持ちにも気づかないし。」

さらに、悪質なストーカーとなると時々星羅にまで被害が及ぼうとすることがある。そして、その対処を俺が陰ながらしているせいということもあり、被害は甚大である。

今だって、俺はただ穏便に下校したいだけなのに隣の電気屋を曲がって商店街から路地に入った途端に何者かが襲ってこないかと、びくびくしている。こんな生活のせいかいつの間にか俺の足はかなり鍛えられた。……ええい、ちくしょう。どう見ても立派な大根足です。本当にありがとうございました！！

「ん？ゴメン、何て？聞こえなかった。」

「な、っなんでもないわよ」

「……そんな、怒鳴らなくてもいいだろうに。それよかファンクラブ（ストーカー）には気をつけろよ最近の奴は過激だからな」

「それは、こっちのセリフよ」

「うぇ、縁起でもねぇ事いうなよ。俺は、昨日のあいつだけでもうおなか一杯というか、足がいっぱいいっぱいだってのに」

「……昨日のあいつ？　って、そういえば昨日なんで先に帰っちゃたの？　おかげで私、一人で帰らなくちゃならなかっ――」

『――次のニュースです。○×県の○×○市でまた、連続通り魔事件がおきました。被害差は２０代の女性で連日と同じく固執に何度も刃物で刺された跡があり。今回の事件を含めると軽傷者は二名重傷者は四名、死亡者にいたっては二名と異例の事態のなっており、警察は対策本部を○市に移し捜査活動を――』

「また、通り魔？　て、言うかこれ私たちの住んでる地区じゃない！　こんな身近まで通り魔きてたんだ。なんか……怖いね。」

ふと足を止め、普段は見向きもしない電気屋の液晶テレビに俺も目を向ける。どうやら通り魔は何かオカルトチックな文字を犯行現場にいつも残しているようだ。かなり不気味だ。最近までいたい病気からいまだに抜け出せずそういったものに憧れを抱いていた俺でさえうすら寒く感じるほどなので星羅のそれは、普段のストーカーのせいもあいまって相当のものだろう。

「ふっ、大丈夫だよ、星羅だったら通り魔なんて拳ひとつでけちょんけちょんさ。そして、俺はそんな白馬の王子様にメロメロメロンってね」

「はぁ、優斗そこは、嘘でも俺が守ってやる。とかそういったこと言うべきでしょ、メロメロメロンって……。なんか、色々と不安がってた私のほうがバカみたいじゃないまったく」

そう言うやいなや、星羅は先ほどのニュースのことなど忘れたかのように、また昨日のことの不満を俺にぶつけてきた。

日はもうほとんど落ちあたりは薄暗くなってきている。

罵倒を聞き流しているうちに、気づけば俺達は、商店街の喧騒を抜け自宅まで後数１０メートルといったところまで来ていた。

目の前の青信号を渡りさえすれば我が家はもう目と鼻と先だ。ちなみに、星羅の家は俺の家のすぐ向かいである。

「ねえ、ちょっと優斗。」

「なんだよ、早く渡っちまわねーと信号変わるぞ」

現に信号の色はもう点滅を始めている。周りの人はもう渡り切っており残すは自分達二人だけであった。

「ねえ、あの人なんかおかしくない？　さっきからずっとこっちを睨んできてるんだけど。ほら、あの黒っぽいカッパ見たいなのかぶってるひと」

「ん？　って、あれ隣のクラスの黒沢浮世（くろさわうきよ）じゃね？ほらいつもタッロト占いとかしてる変わり者って有名な女子。そんなことより、信号変わっちまったじゃねーかよ」

「そんなとって……。いくら変わった子だからって普通あんなところ構わずに睨み付けてくる？それにあの子普段は大人しい子だよ――――っえ、ちょ！！黒沢さん赤、赤、信号赤だってば」

まだ少し離れているが、トラックがこっちにきていた。

さらに運が悪いことは、こういう時に限って重なるらしく。よく見れば運転手はうつらうつらとしている。

星羅の悲鳴じみた声と黒沢の突発的な信号無視が辺りを騒然とさせる。

「みぃつけた」

なんなんだあいつ、あんなにずっとこっちを睨みつけていたのに、俺と目が合ったとたんニヤけ出しやがったぞ。

ぶつぶつと呟きながらニヤけ続けている黒沢は、おもむろに今までその黒フードのなかに隠すようにしていた右手を振り上げ星羅に飛び掛かった。

振り上げられたその右手を見れば、そこには刃渡り３０センチはあるかというぐらいの深紅の狩猟用ナイフが握られていた。

異形の物のあまりの禍々しさに誰もが唖然としてしまう。

それは、星羅も例外ではなかった。

「あぶねぇ」

「きゃっ」

ナイフが星羅を切り刻まんとしているすんでのところで、星羅を抱きかかえるようにその脅威から庇った俺は、腕に刺さったナイフをそのままに痛みをこらえながら黒沢の方へ向いた。

「っつ～、ちくしょう、痛ってぇなあおい。てめ～黒沢いきなり切りかかってくとはどういう了見だぁおい」

「そっそんな、なんで。なんでそんな物を……。私はただ、優斗様に最後の供物を捧げようとしていただけなのに。なんでっ……」

黒沢は意味の分からないことを叫びだし、この世の終わりだと言わんばかりの形相で、その焦点が合わない目をさ迷わせながら、しかしその足取りはしっかりと、あとずさるように元来た道を逃げだした。

「おい、まて逃がすかよ」

ここで、俺が庇った時に浴びた血で震えている星羅のことを考えてやっていられれば、こんなことにはならなかったのだろう。星羅が襲われたということに激昂し我を忘れていた俺は、黒沢を無意識のうちに追いかけてしまっていた。

眩しいくらいのトラックのライトのなかで、最後に聞いたのは、つんざくような誰かの悲鳴じみた俺の名をよぶ声だった。

第二話　馬車の中で竜は眠る

目蓋(まぶた)が重い、視界が真っ暗だ。

俺は死んだのだろうか……不思議と痛みを感じなかったように思える。

いや……、あの勢いでトラックに当たっといて即死でないはずがないだろう。

じゃあ、一体今のこの俺は、なんだっていうんだろうか？

まさか、天国！？　いやはや、そういった類(たぐい)は一切信じていなかったんだが。

こんな、風にそれを否定されるとはな……。って、なんで俺はここが天国って決めつけているんだろうか。目蓋(まぶた)すらまだ開けていないって言うのに。

いや、俺だって逝くんなら天国の方がいいし別に好きで地獄に逝きたいともおもわんけどさ。いかんせん。まったく俺よ、どうしてそんなに考えが安易なんだよ。そもそも、あの時だ

ってもっとよく考えて行動していれば――――はぁ、やめよ、なんか寂しくなってくる。

それにしてもさっきから体中が重たい。と、いうかここかなり寝心地が悪い。背中が痛い。

……そろそろ、起きにゃならんよな。いつまでもこのまま寝そべってるわけにもいかんだろうし、なんか、遠くから軍靴の音も聞こえてくるし。はぁ。

できればこのままずっと寝そべっていたいんだが。体、だるいし。……もういっそ、このままずっと寝てようかな。いやいや、それならもっと寝心地の良いところで……ってまた俺は、現実逃避して。――ん、軍靴？

「よっと、……はぁ、起きちまった。てか、案外簡単に起きられた。じゃなくて、ここ……どこだ？」

見ればそこは、天国というには余りにも殺風景で。また、地獄にしてはあまりにもおどろおどろしくはなかった。見えるのは、大自然。

目の前には、7～8メートル程の幅の道のようなものが15メートル程の高さの岩壁沿いにある。

岩壁と道はかなり長くどうやらここは、岩壁沿いに造られた街道のようだ。さらに背後にある鬱蒼（うっそう）と茂る木々が制する先の見えない暗い森や、見上げれば岩壁の端からも緑が見えることから、人里からはある程度離れたところであろうということがうかがえる。

いきなり自分が見知らぬ場所にいるだけでも俺のキャパシティーはパンク寸前だというのに、そこにはそれすらもどうでもよく思わせるような光景が広がっていた。

人、人、人、――50人程の人がそこにいた、いや、街道らしきところなのだから、人が多少多くいてもさして問題はないだろう。問題なのは、彼らの姿と目の前で繰り広げられている戦闘である。

そう、戦闘。彼らはなぜか戦っているのだ。

屈強そうな体躯の男たちがその身に甲冑をつけ４０人がかりで馬車３台を取り囲むように守っているところを、耳の上や額に角を生やし、さらに数人だが羽や尻尾までも生やしている人々が襲いかかっている。

おいおい、何だよこれ！　なんであの人ら角とか羽とかナチュラルに生やしてんのよ。てか何、あの髪と肌の色。赤色でさえもありえねぇっていうのに青とか緑とか。……初めて見たぞ、あんなの。

それに、あの甲冑と剣。本……物か。やべえ、何だあれ、何なんだよあれ！どこぞのＲＰＧゲームですかここは！！

角を付けた人々は、少人数ながらも常人では計り知れないほどの素早さと自分の身の丈と同じくらいの大きさ程もある大鉈を振りまわし騎士らしき人たちを翻弄していた。しかし、それもやはり数にはかてなかったのか、６人程斬り殺したあたりで次第に取り囲まれ。気づけば一人、二人と順に斬り捨てられていき。ついにはたった１人となってしまった。

そして、その最後の１人も今、その顔に憤怒の形相をはりつけながら崩れ落ちるかのように倒れた。

≪　くそう、悪魔どもめ！おい、積み荷は大丈夫か。被害状況は？≫

≪はっ、積み荷には問題はありません。……しかし、騎士（ナイト）クラスの者を2人も喪ってしまいました。さらに神官（メイジ）職の者が重傷を負ってしまい。今日はもう進むのは無理かと、すぐにでも野営地点を見つけませんと。≫

≪っつ～、しかたあるまい。残りの騎士（ナイト）　クラスの者を中心に3班に部隊を再編成する。くれぐれも、周囲の警備をおこたるな。目撃者は、発見しだい即始末しろ。≫

やっべ、あいつらこっちにきやがった。どうしよ、隠れるべきか！？あいつらの言葉何一つ理解できなかったけど、どう見てもヤバそうな雰囲気だし。何より目線がやべぇ。

って、どこにかくれれば！？　ここらへんで下手に隠れてもすぐに見つかるだろうし。

あぁ、ちくしょうどうすれば、と、とりあえずそこの草むらにでも――

ガサガサ

≪あっ≫「あっ」

「あ、あは、あはははは、……は、ハロ～な、ナイスミートユー」

ニコ

≪……死ね≫

ニヤ

俺を見つけるなり男はそのロングソードを振りかざしてきた。

「ちょ。ちょちょ。タンマ、……タンマ！！　ほら、俺何も持ってないって。なっ、だからほら、そんな危ないもん早く下せって。スマイル、スマイル――」

しかし、俺の言葉は男のロングソードと共に空(むな)しく空を切る。

≪ちっ、ちょこまかと悪魔が。素直に斬られてくたばりやがれ！！≫

「――スマイルって言ってんジャンよ。うを！あっぶね。」

これは、やばい、マジでやばい。言葉通じねぇよ。俺の全力のハッピースマイルセット丁重に返品されちゃったよ。どうしろってんだよ。

なんとか、紙一重で避け続けていた俺だが、それもさも当然のように長くは続かなかった。体には、避けきれなかった斬撃によるかすり傷がいくつもできていた。

さらに、騒ぎに気付いたのか残りの奴らもやってきており、俺は、もう逃げることすらもかなわない状況に陥っていた。

何だよこれ、死んだと思ったら。見知らぬ場所に倒れていてあげく、わけもわからん奴らに殺されるなんて。

くそ、くそ、くそ、くそ！！　何か、何かないのか。

俺の思いとは裏腹に、目の前の現実は非常に無情で。囲まれた俺は、俺の命を刈り取らんとする男たちの持つ死神の鎌により蹂躙される。

じわじわと訪れる死の足音に対し、必死に抗おうと俺の体は、なおも希望を探し続ける。

頭が痛い。ひどい頭痛だ。

しだいに、出血のせいか意識が朦朧（もうろう）となり始めた。

そしてこんな状況の中、俺はありえないものを見た。

神秘的に輝く空色の髪を腰辺りまで伸ばした１０人が見ればその１０人全てが魅了されるに違いないであろう、人形のような可愛らしさを持つ齢（よわい）１３，４くらいの少女が、その世にも珍しい髪と同じ色の瞳をこちらに、じっと向けていたのだ。

死の瀬戸際でありながら、俺はその天使のような

神秘的な美しさと機械じみた無機質な瞳に目を奪われていた。

はは、頭に血が回らないせいか、こんな妄想するなんて……。　しかし、妄想であれ何であれこんなかわいい子に最後を看取られるとは、俺も随分出世したもんだぜ。

無意識に少女の方に手を伸ばしていた。まるで、長年探し求めていたものをやっと見つけたかのように。

すると、少女は俺の手を取り何かを確信したようなそぶりを見せ。すっと立ち上がった

≪所有者（マスター）の存在の認証、完了。内蔵魔導高炉（オールグリーンギア）の始動確認、完了。敵の位置補足、完了。最優先事項（オールグリーンエネミー）の確認、完了（オールグリーン）戦闘を開始します　≫

キュイーンとタービンを回すような音と共に少女の姿が消えたかと思ったその瞬間、俺を取り囲んでいた男たちの体が一気に爆ぜた。

≪な、なんだ。どうしたいったい何があった！？≫

先ほど全体を取り仕切っていたリーダーらしき男が、異変に気づいて声を荒げながら近づいてくる。

≪わ、わかりません。そこの悪魔を仕留めようとしたら、いきなり妙な女が――う、うあああああ≫

次々と、残りの男たちも爆ぜて死んでいく。

≪く、だれか本部に救援要請の伝令を伝えてこい！……おい聞こえてなかったのか！！大至急、救援の要請を――≫

≪必要ありません。終了（チェックメイト）です≫

死屍累々とした中、少女がふわっとまた俺の前に突然現れた。そして、俺の胸にそっと手を置き。

≪Ｓｉｅ　ｚｕ　ｍｉｒ　Ｉｃｈ　ｚｕ　Ｉｈｎｅｎ　Ｅｉｎ　Ｖｅｒｔｒａｇ！≫

その鈴のような澄んだ声を高らかと上げた。

すると、不思議なことに二人を包むかのように辺りが黄金色の光で満ち溢れていく。

「マスターとの契約を確認。これから再生治療魔法を展開します。」

少女がまた呪文を唱えだすと。今度は二人の体が碧色に光りだし見る見るうちに俺の傷はゆっくりだが確実にふさがっていく。

しかし、俺の傷が治るにつれて、少女が時折だが苦しげな顔をし始め。さらには、その体も下から徐々に薄く透明になっていく。

「え、えっと。大丈夫なのか？」

「はい、問題ありませんマスター。マスターの傷は責任を持ってこのアルス・Ｘ・マキナが、その全存在を使って治しますゆえ」

「ちょ、ちょっと待った。そういう意味じゃない、君のそれは大丈夫なのか、消えかかっているぞ。いやまて、落ち着け俺。さっきこの子は何て言った――そう、全存在を使ってマスターを治癒する！？どういう意味だ。今の君の状態と何か関係しているのか！？」

「ですから、私の存在を全て魔力に変換しマスターを私が消滅してでもお治し――　「今すぐ、これをやめるんだ！！」

「しかし、それではマスターの治癒が」　「いい

から、早く。」

「了解、再生治癒を解除します。」

すると、俺たちから発せられていた緑色の光は消え失せ。そして、彼女の透明化は膝辺りでとまった。

「ふう、よかった……一時はどうなる事かと。おい、君もっと自分を大切にしろよ！！まあ、ともかく、アルス・X……マキナさんだっけ。助けてくれてありがとう。」

「いえ、マスター。私はマスターの僕として当然のことを、したまでです。」

「そう、それだ、そのマスターってのは何なんだ。

それにさっきのは？　君は？　そもそもここはどこなんだ？」

「貴方様はこの世界の新たな我ら精霊の主たる精霊王様になるべく転生なさった存在。そして、私は魔導機構を司る魔工の精霊であり先ほどの契約により晴れて正式にマスターの僕へと加わった者でございます」

は、……。何、転生？　精霊王？　契約？　ナンデスカそれは。

その後、色々とアルスにこの世界のことを聞いた話をまとめると。

どうやら向こうの世界でテックソウルなるもの「たぶん黒沢が持っていた深紅の狩猟用ナイフのことだろう」を使った儀式により、俺はこっちの世界の精霊王へと転生させられたようだ。そして、なぜだか本人も知らないらしいのだが、生まれた時から精霊王にその存在全てを賭けて仕えよという使命をもったアルスが俺の転生をいち早く感じ取り。俺を迎えに行こうと来たところ、俺のことを人間が敵対している亜種人だと勘違いした奴らが俺を襲っていたのを発見したということらしい。

いや、バリバリ人間の姿しとるし……と嘆いていたらどうやら、この世界では黒髪黒眼というのは精霊にしろ人間にしろ亜種人にしろありえない色なんだそうだ。

「てか、まあもう、人間やめてるみたいだけど……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもねぇよ。それより、アルお前、俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「アル？　マスター、アルとは誰のことです？ここにはマスターと私しかいませんよ」

「お前だよ、お前。アルス・X・マキナなんていちいち長ったらしくて呼びずらいんだよ。だから、親睦を深めるって意味も込めてアル」

「アル……アル、いいですねアル！私、とても

気に入りました。こんな気持ち初めてです。この名前、大切にしますね！」

そういうと、アルは少し顔を赤らめ何度もマスターがくれた名前、マスターがくれた名前と呟いている。

「気に入ってくれたのはいいんだが、アル、お前顔赤いぞ。まださっきの存在消滅の後遺症があるんじゃないのか？あんま、無理すんなよ？」

いまだ一人で呟いているアルの顔を覗き込む。

「はひィ、だ、大丈夫ですなんでもありません」

「お。おう。そうか。ってそうだ。さっきも聞いたんだが俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「それは、……私にはわかりません。マスターは元の世界に戻りたいんですか？」

「いや、ん～まあぶっちゃけ。長年夢見ていたファンタジー世界にこれてかなり嬉しいよ、しかもいきなり精霊王なんていう胸高鳴るジョブになってるし。さっきは、かなり危なかったけど。これからここで暮らしていくのも悪くないなとおもってるんだ」

「でしたら――」

「でも、俺さ、向こうの世界でやり残したことがひとつだけあるんだ。それがちょっと心残りなんだよ」

「そう……なんですか」

話しながらさっきの男達からの戦利品をちゃっかりと入手するべく作業をしていると、残すは男達が必死に守っていた馬車だけとなった。

1台目と2台目の馬車のなかには寝袋や食糧といった冒険するための道具がそろっており、かなり良い収穫であった。

しかし、問題は3台目で起きてしまった。

そのなかにあったものは、なんと檻の中で眠っている少女であった。しかも、ただの少女ではなかった。少女の整った顔立ちや、その白髪の背中まで伸ばされたふわふわとした髪に掛けられた薄汚れたフードによって隠されているかのようにそこには角があった。

少女の耳の上には羊の角のような少し湾曲した立派な角があったのである。

「……」

「どうかいたしましたか、マスター？　……女の子のようですね。マスターどうしますか？その子」

「どうするも何も、こんなところに1人置いていくわけにもいかないだろ。夜になったら何がでるかわからんし」

「ですが、マスター連れて行ったところでこの子にとっての安全はさほど変わりませんよ？」

「え？　なんでさ。こっちにはアルがいるし。それに、もしものときは、俺も微力ながらもこの子を守るからここに置いてくよかよっぽど安全じゃね？」

「すみません。マスター先ほどお伝えし忘れていたのですが私、先ほどのような力はもう発揮できません。存在を魔力に変換した際に精霊としてのランクが降格した上に契約したばかりなので魔力制御ができない状態なのです。さらに私、最近生まれたばかりなものでそもそものステータスが安定しておりません」

「うそ」　「ホントです」

「いやいや、だからって置いていくわけにはいかないよ」

「わかりました。では、私もできる限りのサポートを尽くさせていただきます」

「うん、よろしくたのむよ」

少女を担ぎ。取りあえずは、どこか人がいそうな所を目指そうと、これからの方針を決め、準備を整えた俺たちは、赤くなり始めた夕空を背に街道を進むのであった。

はあ、星羅いまごろどうしてるだろ。何事もなければいいんだけど――

こうして、俺の異世界転生の一日目は幕を閉じるのだった。

第三話　シチューの味

あれから、程なくして俺達はなんのトラブルも無く無事に宿場町らしき所までたどり着いた。現在は最初に発見した宿の中にある酒場で、注文した料理をまっている。

先ほど人間じゃないということだけで襲われた俺だったが、幸いにもこの町は亜種人と人間が共に暮らしている町らしく、町の門番に呼び止められこそしたがなんとか怪しいものではないと納得してもらい中に入る事が出来た。

そもそも、先ほど宿屋のおばちゃんに聞いた話しによると、亜種人を敵対視しているのは人間の中でも白の神と呼ばれる神様を信仰している者だけらしい。

まぁ、どちらにせよ俺とアルの瞳と髪の色に加えてボロボロのフードをかぶった女の子を背負っているせいで町に入ってから終始目線が痛かったが……

ちなみに、宿代は先ほどの甲冑野郎どもからの戦利品で難無くすんでいる。

「で、早速なんだがこれからどうしていこうかアル」

「そうですね、私もそうなのですが、まずは、マスターのステータスが安定なさるまではどうにも……」

この世界には人や生き物、さらには道具などの力量や職業などの適性力、それが持つ危険度を測るためにレベルやステータスというものを用いて測るのだそうだ。

これは、体内などに必ずあるといわれている魔力回路というものから測るらしく、現在俺とアルは生まれたばかりということでその魔力回路が不安定でレベルやステータスが測れないばかりか本来の力すら満足に出せない状態であるらしい。

「ん～なあ、アル。そもそも、精霊って何なの？」

「精霊というのは、私のような何らかの強い力を持った道具や生物が長い年月を経てその身に一定の純粋な魔力を宿した者、または力そのものが集まり意志を宿した者だと聞いています。また精霊は自分が司っている力の管理をし、その力が絶え間なく流れるよう世界の均衡を守る役目があります。そしてマスター、もとい精霊王様はそれら精霊達を取りまとめ時には見守り、時には罰していく我々の父であり母なのです」

「我々の父であり母なのです……っか。なんか、そう言われると俺なんかが精霊王になっちゃっていいのかな？　て、おもえてくるよ。現にさっきは、何もできずにアルに存在を消費してまで助けてもらっちゃっただけだし」

「マスター……大丈夫です。マスターならきっと素晴らしい精霊王様になられますよ」

こんな何のとりえもない俺でもアルは、俺のことを精霊王として認めてくれて、献身的に支えようとしてくれている。

「アルは優しいな」

「い、いえそんな」

アルのためにも立派な精霊王にならなくちゃな……。

「あ、そういえばさ、俺の前の、そのつまりは先王の精霊王はどうなったのさ。それか今までの精霊王は？　会えればこの世界のこととか、精霊のこととか色々詳しく教えてもらえそうだし、俺も少なくとも今よりはうまく精霊王としてやっていけそうなんだけど」

「先王も何も、今までそのような者は一人もいた記録はありませんよ。マスターが最初の精霊王様で

す」

「は？　どうゆうこと」

「私達にとって精霊王様というのは、マスターの世界でいう神々のようなものでして、伝承やおとぎ話でしか知り得なくその存在すらいるかどうか怪しいものでした。ですが、数年前、ちょうど私が生まれた時ぐらいでしょうか、ある人間の魔導師が私達精霊に精霊王がもうすぐ転生してやってくると予言し、そして私達精霊もまたその存在の波動を感じ取ったのです」

……驚愕の事実再びである。

「あ、マスター。予定よりかなりはやいですが私達のステータスが確定されようとしていますよ」

ちなみに、数年前に誕生したアルとさっき転生したばかりの俺がなぜ同じタイミングでステータス確定するのかというと。もともと精霊王というのはその存在の力の大きさゆえに成長が驚異的にはやいからだそうだ。そして、精霊王が成長する時に発する特殊な波長に当てられたアルもまた成長が驚異的に促進させられたらしい。

そうこうしているうちに、俺とアルの体が契約をした時みたいに強く光りだした。そしてさらに今度は体中に黒い入れ墨のような線が幾重にも体をめぐった。

「わ、いったいなんだい……

…大丈夫かい黒髪のお兄さん」

光と線が現れたのは、一瞬だったがなんとも言えない痺れが体中に駆け巡り思わず目の前の木製の長机に突っ伏してしまった。

「え、ええ。なんとか」

「今は、他の客が少ないからいいけどあんまり室内で魔法はやめとくれよ。ほれ、料理そこに置いとくからね」

気づけば、体中になんとも言えない不思議な力があるような感じがする。これが魔力ってやつなのか。何かふわふわする。体も軽い。

「はは、ありがとうございます。おばさ――おねえさん」

「ん、わかればよろしい」

やべぇ目が本気(マジ)だった。背すじに感じた寒気により何とか起き上がることができた。

「おや、そっちのフードのおちびちゃんも起きたようだね」

町に着いてから起こそうとしたが起きず。また、俺が離れようとすると寝苦しそうに唸るのでそばで寝かせて置いたのだ。よく見れば頬に涙の筋があったこともあり相当辛いことがあったのだとうかがえ、可哀そうに感じもうすこしぐらいは寝かしておいてもいいかなと考えたからでもある。

「う、ううん。」

「おはよう、って言っても今はもう夜だけどね」

「え、こ、ここは!?」

「取りあえず、座りなよ。ちょうど飯もあることだし一緒に食べながらはなそう」

「は、はい」

すると、少女は椅子ではなく地べたに座った。

「なにしてんのさ？　早く隣にきなよ。料理冷めちゃうよ」

「あの座っていいんですか。私なんかが隣に座って一緒に食事していいんですか」

「はあ、何いってんのさ、さっきからそう言ってるじゃん。ほらはやく、俺もう腹ペコなんだよ」

少女は、おそるおそると座り

目の前のシチューもどきをまじまじと見つめる。しかし、見つめるだけで食べようとはせずまだおろおろとこちらを見上げる。

（ん？　あぁ、なるほど首輪が邪魔なのか）

（マスター、彼女の首輪取ってあげたらどうです）

（ん、そうだな。……ってアル！？　へ、なにこれ）

（先ほどステータスが安定したことによって念話ができるようになったのです。契約している精霊とならどれほど離れていていても会話することができますよ）

（すげー。携帯要らずだな。っとそうだった首輪だな。ていってもあんなごつい首輪どうやって外せばいいんだ？）

（そのまま首輪に手を当て外れよと念を飛ばせばいいのです。ですが、折角ですので今回は私の力を披露しましょう。これからマスターに憑依します）

というやいなや、アルは光だし半透明になって俺と重なる。そして文字通り背後霊のように俺の後ろに憑依した。

（うを、なんだこれ。アル、青白い光の線が見えるようになたっぞ）

（はい、マスターそれこそ私の魔工精霊としての力、魔力観測です。首輪の中に見える青白い線のどれでもいいので切れろと念じながら指で切ってみてください）

いわれる通りに首輪の中に見える青白い線のうち一番太い線を指でなぞるようにしてみると、ぷつんといともたやすく線は切れた。そして、それと共に首輪が光の粒子となって消え去っていく。

「おどろいた、あんた精霊使いだったのかい。そのなりからただもんじゃないな、とは思っていたがまさか精霊使いだったとはね。しかもなんだい、実体化出来る上に人型の精霊なんてめったにお目にかかれないような高位の精霊じゃないか。さらに、完璧服従ときた、はぁ～たまげたもんだ。……それに、奴隷の首輪をはずしてやるなんて粋なことすねやるじゃないか。この～色男が」

「ちょ、やめてくださいよ」

アルの憑依を解き、指でつつきながらからかってくるおばちゃんをあしらいながら料理を一口食べる。お、想像以上に美味しい。

「照れるな照れるな、よかったね。おちびちゃん」

「ほら、君も早く食べなよ。美味しいぞ」

少女は、今起こったことが信じられないのか口をぽかんと開けたまま唖然として固まっている。

いつまでたっても動きそうにないのでその開いた口にシチューもどきをスプーンで掬って入れてやる。

「お、美味しい……。美味しいです」

「だろ」

「はい、ほんとに……美味しい……ふぐ、えぐ、……ずず……グズ」

「おいおい、泣くこたぁないだろうよ。ほら、旨いもん食ったときはうれしい顔しなきゃ、な？」

「はい」

ニコ

その後、泣きながら嬉しそうに、そして必死に料理をほおばる少女が落ち着くまで話し合いはせず食事をすることにした。遠い昔、星羅と一緒に食べた母さんのシチュウ―の味をおもいだした。

第四話　それぞれの事情

場所は変わって、今俺たちは宿の自分達の部屋の中にいる。

「と、それじゃ食事も済んだってことであらためて、はじめまして。俺の名前は、神崎優斗。あ、神崎の方がファミリーネームで名前の方が優斗ね。そっちの娘は仲間のアル。馬車の中で見つけた君をほっておけなかったもんで悪いけどここに勝手に運ばせてもらったよ。そうだ、君の名前は？」

「……名前」

またも、泣きだしそうになる少女。

「え、どうしたの？」

「いえ、またお父様とお母様から頂いたこの名を名乗れることができるなんて夢のようで――これもそれもユートさんとアルさんのおかげですね……私はクラン・クル・マルグリットといいます。助けてくださってありがとうございました。ユート

さんとアルさんは命の恩人です。それに奴隷の首輪まではずしてもらって、――どれだけ感謝してもしきれません……このご恩はかならずやこの命をもってしてでもおかえしします」

「命の恩人だなんて大げさな。お礼なんていいよ。俺はただ人として当たり前なことをしただけさ。あと、首輪の方もきにしなくていいよ、さっきの様子から奴隷っていうのは俺の想像している通りのことだろうからさ――俺、そういうの許せないたちなんだ。アルもそうだろ」

「はい、勿論でございます。マスター」

「でも、あのままだったら路頭で飢え死にして魔物か野生動物の餌になるか、どこかの変態に飼われて尊厳を踏みにじられながら生きるしかなかったところをユートさんは希望を与えてくれました。そんな方にお礼もしないだなんて――それになにより竜人（ドラグーン）としての私の誇りが許しません。どうか、私になにかさせてください、なんだったらこの体を使って――」

「ストップ、ストップ！　わかった、わかったから。いくら今ここに俺らしかいないからって脱ごうとしないで！！」

「わかりました」

「ふう～しかし、お礼か――ん～どうしようかな」

（マスター）

（ん、どしたアル）

（先ほどの、この世界の説明の話の続きなのですが。私、あとは精霊としての有る程度の常識と魔工のこと、それと少しだけの魔法に関する基礎知識しか知らないんです）

（と、いうと？）

（つまり、この先人として肉体を維持していかな

くてはならないマスターのこの世界での生活のサポートやアドバイスができないことになります）

（げ、マジかよ。今はまだ鎧野郎どもからもぎ取った金やらなんやらがあるからいいけど。こりゃ早めに職やらなんやらをどうにかしなければな――――あ、そうだ）

「なあ、クラン。君この世界のことくわしい？」

「この世界？　世界のことはわかりませんが生きていくすべとそれなりの常識はあるつもりですけど」

「それじゃあさ、これから俺らの仲間として一緒にいてくれないか？　そして、出来る限りでいいからさ俺達にアドバイスをしてくれよ。実は俺達、ある秘境からやってきた身でさ、色んな事をしらないんだ　アルもそれでいいだろ」

「無論マスターのご意思に反対などございません」

「あの、そんなことでいいんですか。いえ、というよりも私なんかがついて行っていいんですか？」

「もちろんさ。むしろこんなかわいい子と一緒にいられるんだから贅沢なぐらいだよ。だからこれからよろしく」

クランの顔を覗き込んでに微笑みかけてやる

「は、はい」

うん、やっぱり。かわいい子には笑顔がいちばんだな。

――顔が赤くなっているのがちょっと気になるけど。ほっとしたからかな

あと、アルなんでそこで睨む。俺なんかしたか？

「マルグリット……マルグリット……竜人（ドラグーン）のマル

グリット……あ！まさかおちびちゃん。あんたここからずっと北西にいった竜の国（ドラグシア）の第三王女のクラン・クル・マルグリットかい！！
――あ、布団ここにおいとくよ。」

「へ！？　は、え、いや。あっと、えっとその――」

「クランって王女様なの！」

て、いつのまにおばちゃんここに来たの！！というかどこから聞いてたの！？

「う～、は、はい。そうです」

「王女なのに奴隷？　どういうこと。あ、いや話しづらいことだったらべつに話さなくてもいいんだけど――」

「いえ、ユートさんとアルさんになら話してもいいんですが――長い話になりますよ？」

「いいよ、何より俺はクランのことが知りたいか

ら」

「わ、わかりました。じゃあ話しますね――今、竜の国（ドラグシア）と人間の国こと白の国（アマルル）が妖精（ティータニア）の国の魔石をめぐって争っていますよね」

「え、そうなのかい」

「な、なんのこと」

「そう、なのですか」

「……皆さん、知らないんですね」

「常識なの！？いや、そんな残念そうな目で見ないでよ」

「ここ森（ニリム）の国は他の国と少し離れたとこにあるか

らねえ。それに、こんな田舎の宿場町にそうそう新鮮な情報はこないよ」

「戦争ですか、力の変動が気になります。他の精霊たちは何か行動を起こしているのでしょうか。マスター、どう思います？」

「どうって、そんなこと聞かれてもな――て、あなたは、いつまでここにいるんですか！仕事はいいんですか？」

「あ？いいんだよ。何か今日客すくないから」

「えっと――と、とりあえず皆さん話続けていいですか」

「あ、ああ、すまないクラン。続けてくれ」

「で、その二国が戦争をしているんですが。私の国つまり竜の国（ドラグシア）では、戦時直前急に王族率いる穏便派と、宰相および上流貴族率いる強行派のいがみ合いをはじめてしまって内政は無茶苦茶になってしまったんです」

「それがクランが今ここにいるのと、どう関係が？」

「泥沼化する睨みあいの中、ある日痺れを切らした強行派がついに王族殲滅という愚行に走ったのです。ほとんどの貴族に根回しがいきわたっておりまた。また、私の腹違いの姉の一人である第二王女ジル・フェルゼ・マルグリットの裏切りもあって、私たち一族はなすすべなくただ淘汰されていくしかありませんでした。そんな中私の家族は、多くの犠牲を払いながらも命からがらなんとか国境近くまで逃げ切っていたのです」

クランの顔色が段々と暗くなっていき、かすかに体も小刻みに震えている。

「ですが、あと一歩で隣国の魔法（エルニカ）の国へと亡命できたというところで、何故かそこで待ち伏せしていた白の国（アマルル）の艦

隊と鉢合わせになってしまったのです。お父様とお母様は、その命尽きるまで必死に私と第一王女であるラウ・フェルゼ・マルグリットお姉さまと第一王子であるクルス・クル・マルグリットお兄様を守ってくださいました。しかし、その決死の抵抗も空しく私達三人は捕まりました。そこで、ラウお姉さまとクルスお兄様はせめて私だけはどうにかして逃がそうと二人で決心なされ、私の逃げ出す活路をつくりだそうとしてくださったのです」

その時のことを思い出したのかクランの頬には一滴の涙がつたっていた。

「最後に見たのはぐずりながら二人を止めようとする私に優しくそして仕方なさそうに微笑みかけてくれたラウお姉様とクルスお兄様の後ろ姿でした。私は、ただ逃げることしかできなかったんです。大切な人たちを見捨てて――それが、ここまで私を生かしてくれた人たちの思いにこたえる最後の方法だと信じて――――なのに、なのに私は結局捕まってしまって！！」

クランの泣きじゃくる姿をこれ以上見ていられなくなった俺は、その小さい体をそっと抱いた。

「あ――ぐす――すいません。また、見苦しい

姿を――見せちゃいました」

「いいんだ、クラン。俺たちはさっき結成したばかりだけどれっきとした仲間だ。仲間ってもんは嬉しいことも悲しいことも共に分かち合っていくもんだよ　そうだろ？　」

「はい」

「クランさん、これからは私とマスターがずっと一緒です。まだ会って間もない私達ですが存分に頼ってください」

「アルさん――お二人ともありがとうございます」

「あんたら、いいやつだねぇ。おばちゃん感動しちゃったよ。やっぱり精霊使いの貴族様ってなるとそこらへんの冒険者とは器の大きさが違うねぇ」

――この人結局、最後まで一緒に聞いてたのかよ。

つか、今自分でおばちゃんって……

「あの、俺別に貴族なんかじゃないんですけど」

「何言ってんだい、そんな上等な服身につけて。そんなのよっぽど高貴な人しかきれないよ」

たしかに、見た限りこの世界の生活水準は、RPG風らしく中世ヨーロッパぐらいの水準みたいだから、俺の今着ている詰襟の学ランはかなり周りから浮いている。

そういえば、なんで転生したっていうのに俺は学ランをきているんだろ？　いや、生れたまんまの姿であんな街道沿いの森の中にほうりだされていてもこまるんだけどさ……。

「この服は、そのちょっとわけありでして。えっと自分でもなんで着ているのかわんないっていうか。なんていう

か。ははは」

「はあ？どういうことだい」

「とにかく、俺は貴族何かとは違いますよ」

「そうです。マスターは貴族なんかじゃなくて精霊王様なんですから」

「は！？」「え！？」「ちょ！？」

何いってんのこの子！！　それはいっちゃだめでしょ。仮にも俺、精霊（きみら）達の神様なんでしょ！？　クランはともかくおばちゃんの前でそれ言っちゃまずいでしょ。

「信じられないけど。嘘がつけない精霊がいうんだからほんとうなんだろうねぇ」

「あの、えっと私。ユートさんが精霊王様とも知らずなれなれしく触ってしまって――えっと、そのすみません」

ほら、二人とも混乱してる。

（アル）

（なんでしょう、マスター）

（力のある精霊とかがどういった扱いをされているのかもっとよく考えような　俺、伝説上の生き物なんだしさ　）

（？　はい、マスター）

「二人とも落ち着いて、あとクランはそんなに畏まらなくていいから」

「は、はい」

顔がこわばっているぞ、クラン……。

「それにしても、なんで精霊王なんてのがこんなところに。まさか、ちかじか何か良くないことでも起きるのかい」

「いえ、それは俺にもわかんないんですけど。俺がいるのは気まぐれみたいなものだとおもってください。　あと、クランと俺のことは内密に」

「任しときな、わたしゃここらへんで一番口が堅いって有名だからさ。ホントだよ」

本当に大丈夫なのか。俺の勝手なイメージじゃこの人ついうっかりそこらへんで喋ってしまいそうなんだが……。

その後、おばちゃんは部屋から出ていき。俺達も今日はもう疲れたということで、今後ことは明日になってから話そうということになった。

それぞれ床に就くと、すぐに二人のかわいい寝息が聞こえてきた。

俺も色々あったからか布団に入ったとたんに眠気が襲ってきて深い眠りに落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9624x/

トランスマイクリエーション

2011年11月23日15時43分発行